

見えない子供たちの現実

家庭教師の目

⑤



子供の叱り方、叩き方

仕事柄、私に関わっていたある

中学校での出来事です。ある日、親の言うことをまったく聞かない悪ガキ五人が、木刀を片手に職員室に乱入しました。先生たちは止めさせようとしたのですが、とても手におえません。骨折する先生まで出る始末でした。

この事態を問題視したPTAは、会議を開きました。不良生徒にどう対処したらよいのか。先生たちは口惜しさを噛み締め、怒りに震えながら、この会議に出席したことでしよう。その時のやり取りが、今も印象に残っています。

かんかんががくの中で、PTAの人がこう主張しました。「子供たちにも人権があるのだから、どんなことがあっても、叩いてはいけない」。これに対して、骨折

した先生は憤りを隠しませんでした。「我々の人権はどうなるのですか?」

学校の先生たちは、生徒の人権を尊重する余り、注意しても聞かない生徒に手を上げることは適わず、逆に叩かれてばかりいます。こんな非道がまかり通っているのでしょうか?

私は思います。叱つても分からない子は、叩くべきです。愛情を込めて叩いてあげればいいのです。ただし、いきなり叩かないこと。叩く前にきちんと叱ってやることです。きちんと叱るといえるのは、正面から心でぶつかっていくという事です。これが基本姿勢です。その上で、頭ごなしに否定せず、その子なりの言い分は聞いた上で、なぜダメなのか、教えてあげて下

さい。これにより、「悪いことをしたのだから、叩かれても仕方ない」と子供たちに認めさせ、その上で、思い切り叩いてあげるのです。

その叩き方という点、私の場合、基本的には、小学生ならお尻を平手で打ち、中学生なら頭をゲンコツで叩くようにしています。女子中高生には、教科書や名簿の角でコツンとやります。頬の平手打ちはしません。鼓膜を破る恐れがあるし、顔全体に表面上の痛みが残る平手打ちより、頭の一点に痛みが残るゲンコツの方が、スマートかつ有効だと思うからです。こんなふうに叩いてあげるためにも、子供たちにとって大人は、怒らせた怖いのが、本気で話を聞いてくれる存在でありたいもの。参考までに、私の経験をお話しておきましょう。

以前、面倒を見ていた子供が通う中学校の職員室に電話したのですが、その時、なぜか生徒の一人が出て、「いちいち電話掛けてくるな!」と一方的に切りました。頭に来た私はすぐかけ直し、その生徒にたんかを切りました。「おい、誰にいいよるか! 今すぐ行くけん、そこにおれ!」

駆け付けた私を待っていたのは、まっキンキンのトンガリ頭をした、二年の番長という子。私は強い口調で言いました。「どういうつもりだ? 謝れ!」

この子はペコリと頭を下げました。しかし、私は許しませんでした。「本気で謝れ!」。私は本気で彼にぶつかりました。そして最終的には、土下座させました。

やり取りを見ていた先生たちはびつくりしていましたが、彼が悪ふざけが過ぎたことを分かった上で謝らせたのです。

後日、これが縁で私のところからその子に家庭教師を付けました。彼にとつて良い兄貴役になったよううで、もう以前のように荒れるようなことはなくなりました。

文・中村信二



1963年福岡県生まれ。家庭教師派遣で福岡老舗の株式会社日本学術講師会、高校入試問題集のベストセラー「虎の巻」出版の株式会社カクジュツの代表取締役社長。福岡青年会議所で教育問題調査会副委員長や社会参画推進委員会委員長などを歴任する傍ら、TV、ラジオにも出演。現在、貧しい子供たちのための「無料塾」開設を構想している。家庭教師の問い合わせはフリーダイヤル0120-41-7337へ